

注解『七十一番職人歌合』稿(七)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第十七番および第十八番の注解を取めた。

十七番 挽入売 土器作

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕六番左 深草

月ゆゑにうちへもいらてとにたてはやうのものとや人の見るらん

右哥……勝とすへし。

ひとめみしかはらけ色のきぬかつき我にちぎりやふかくさのさと

左、詞のたよりを存て、恋の心もたしかにきこゆ。……仍持たるへし。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕五番左 土器作

かくはかりまとかになりて照月のあかかはらけのわれぬよもかな

〔吾吟我集〕寄盃恋 恋衣妻迎へにし盃に酔ふては顔も色直しする / 寄皿恋 色深く人をば思ひそめつけのさらに忘れぬ我

注解『七十一番職人歌合』稿(七)

が心哉〔訓蒙図彙〕陶家たうか すへものづくり、陶人、陶工、陶者、甃者、並同。瓦工、かはらやき。「長崎一見 職人一首」八番右 五器塗師 爰進も花塗りなれや五器塗師やはげしからしをば思ひ汁碗 左の紺掻の古袴、右五器塗師のはげしからし、いづれもの上、折々の賄ひをせられ共、それはみそみにこそ。和哥の道とは此の黒主も一家の事なれば、少しは鼻屑にこそ侍れ。其なき人の口にすり漆と言わんこともはづかしと思ひ、依怙を侍らす。愚意の及ぶ誠をあらはし侍る。右は、花塗りの秀でて聞こゆ。左は、紺屋の朝公朝公、面白く聞こゆ、用いたし。「銀葉夷歌集」寄盃恋 君思ひ入子盃取り出だしちと酔ひたまへくだまき絵程へ正信▽〔人倫訓蒙図彙〕土器師 昔賀陽親王作り始め給ふとかや。此の御子、細工に妙なるよし古物語に記せり。都は嵯峨、篋枝、深草里に作る。大内に捧ぐる時は、烏帽子装束して参るなり。江戸浅草竹町、作手弥左衛門。誠に上古よりの器物なり。／ 焼物師 土器の焼物、茶碗、茶入、花入、壺、皿等、其の品多し。肥前の唐津始めとして、都におもても所々にあり。共、肥前唐津焼を面に商ふゆへ、瀬戸物やといふ也。所々にあり。「用明天王職人鑑 職人づくし」野辺の木地屋の轆轤引き、引くや夕なの梳櫛や……〔春駒狂歌集〕中腕に寄する恋 口つて末のかさ迄かはらじと契る二人の中の中腕〔狂歌種ふくべ〕寄盃述懐 よい事の有りさうなれば押さへられいづれに楽しみにあひの盃へ豊瀬氏我童▽〔誹諧職人尽〕挽入壳 四ツ五器の揃はぬ花見心哉 芭蕉 紫陽花を五器に盛らばや草枕 嵐雪 碗屋より手を打ち続け神の春 沾洲 散り失せず梅に松葉や会津碗 松遊 碗売の年の夜叩く水鶏かな 青祇 碗売や蛙鳴きする年の市 志願 碗廊に春の光や年の市 万迪 碗飯のねんごろ久し根来碗 塚和 土器作り 愛宕にて 綿を散てかはらけを待つ霞かな 水花 愛宕から土器町へほととぎす 珪琳 手のひらへ落葉受けたりかはらけ師 二世盤谷 土器の干しかねる上に落葉かな 蝸名 炭竈に煙は低しかはらけ師 子蓬 かはらけの固まりかねし秋日和 水戸 豆花 谷底にをのが花ありかはらけ師 全晴蜂改 意中 夕されば野辺の秋風身に入てと詠ぜしを かはらけも破るるばかりの鶉かな 上総武土郡 寿躰 元政の会式の客でかはらけ師 雅光 鶉啼く深草や子も土なぶり 旌祥 思へばや土器作る花所 調羽 白雨や干ぬに取り込むうち曇り 祇風 暑き日や名も深草の土器師 園芝 土器の唇寒し初揚屋 塚和 〔今様職人尺百人一首〕かわらけ師 ひきしいと土をば捏ねよかげんとも水つげごと廻るかわらけ 「土の加減が大事」「火燈を拵へて何にかかろふの」／ 茶碗焼 古の奈良の焼き地の焼き出しはけふ大坂に聞こへぬるかな 「大方葉がかつたか」「下絵を付けめされよ。出来によつて廻そうぞ」〔彩画職人部類〕土器 洛の東山深艸の里に多く是を業となす者居れり。最上品とす。東都は箕輪金杉のわびしき、土の轆轤の音がすかに、さすがに陶作りといふほどにもあらで、あるほどの日南に並べ在り。うらくと陽炎もゆる雨上がりの朝景色、鶯の声、なよ竹のまばら垣に、そこ爰鄙びたる住居こそ何とやら哀れ深し。「職人尺筈句合」二十六番右 陶器師 瀬戸物に光りて涼し月の波 瀬戸といふよりして、月の波とかけ合ひたる、聞きさか応すまじ。発動の姿見えずしては、波の音入りがたからむ 「唐物をうつすべき土の欲しきよ」〔職人尺筈歌合〕五器造 聞かやいかに吉野の輿の五器造五器村近き山ほととぎす 左、むつかしげには侍らず。右……勝つべくや。／ 土器造 かはらけ師かけたと聞きし片割

れの月こそ残れ山郭公 左、趣意とほしらくけだかき様なり。かどある作者の哥なるべし。……左、またき勝にて侍り。……土器造 一声に思はず落とすかはらけの我ひとり聞く初ほととぎす 左、四の句の趣は、也有翁の、われ世の中にと詠み申されしにも通ひて聞こえ侍れど、下旬性情ありて、優に寛へ侍り。……左勝りぬと申すべきや。／ 土器造 かはらけを造るそばから郭公かけて鳴くなる深艸の里 左、深草の里をさへ取り出でられし、優におかしくこそ。……なほ左の方勝り様によ。／ 土器造 うちくもり千さぬ土器の五月雨におとと恋しと鳴く時鳥 ……右、うちくもりといふ。かはらけよりおととと続けて狂じたる、よろしけれど、猶神皇正統記の説によりて、南帝をもて尊し（左勝）とすべくや。「今様職人尺歌合」陶物師 今一度焼き継ぎもがな十六夜に少し缺けたる皿山の月 十六夜に少し缺けたる皿山は、陶物師の焼き継ぎ手際よろしく、目に立つほどの瑕も見えずながら、さらしなところ言ふべきを、皿山と詠まれたる、月の名所とも覚えす。上手の手より水の漏るとや申さん。……（樋竹壳の歌）動かぬ勝と定め侍り。「此の頃は素人の楽焼がはやりて、詠へのなき。焼き継ぎは、塞<sup>た</sup>塞<sup>け</sup>にてうるさや」／ 月の中の葉をかけて見渡し此の山水や染め付けにせむ 陶物師の月、魚壳の花、とりぐに興あり。一荷になふべし。／ 陶物のちをねる間も惜しまれて月の葉の廻る山の端 咲く日より散るを厭ひて桜花いつまでか枝にすゑものにせん 月愛つる邪魔になるると此の頃は焼く土器に雲を移さん 「宝舟桂帆柱」挽物師 挽物の丸きは角のなきゆへに鍍金までもよく廻りたり「金の蔓を挽物師、くるく廻る身代とはありがたい」／ 瀬戸物屋 商売の瀬戸物造る土一升金一升にかゆる榮しき「これは新渡の土物じや」〔難波職人歌合〕下、六番右 瀬戸物屋 ことならば商ぶ物も何せむに破れて碎けて物思ふ身は 左の方人云、売りしろなすべき物をさへ不用にせんとは、命に替へむといへらむよりも、一家の内の人皆にかかはりて、便なう浅ましき迷ひと云ふべし。右方答、せちなる恋のたとへには、何事をいはむも憚るべからず。判に云、……右の歌、破れて碎けてと云はん料に、商ぶ物もといはれたるは、昔の歌合に、悪しざまに取り落としつる、と云へりけん土器売にもまして、をかしと云ふべし。方人達の論は、いほでも有るべきことぞかし。いみじき勝と云ふべし。

【本文】

十七番

穠うるしぬる夜はいかにわれひき  
 はけめはしろきむら雲のつき  
 かくはかりまとかになりて照月の

注解『七十一番職人歌合』稿(七)

穠うるし―〔尊〕類〕秋うるし  
 しろき―〔類〕白き むら雲のつき―〔類〕村雲の月  
 照月―〔尊〕照月

あかゝはらけのわれぬ夜もかな

左、さる事とはきこゆるを、はげ目といふや  
たゝ詞ならむ。絶間といふへきを、ひきれに

ひかれていへるにや。右は、満月をよめり。

あかゝはらけのわれすもかなとねかふも、けに  
ときこゆ。かの好忠か古風、いさゝかのこれる  
にや。可為右勝。

わか恋はしはすのはてのうりひきれ

ぬるかとするはいそくわかれち

あしさまにとりおとしつるかはらけの

われてくたけてものおもふかな

左、しはすのいそかはしきになまぬりの

ひきれは、さもと聞えたり。右、又文字、

いかにそやきこえ侍れとも、末の句を

はらめるもあしからず。われてくたけて物

思ふ恋の心、猶よろしきによりて、為勝。

◇

◇

ひきれうり

これはいなは

かうしにて候。

めせ。

あかゝはらけ―〔類〕赤かはらけ 夜―〔類〕よ  
さる事とはきこゆる―〔類〕さることゝは聞ゆる  
〔尊〕〔類〕はげめ いふや―〔類〕云や  
ならむ―〔類〕ならん 絶間―〔類〕絶ま  
はげ目―

ひかれて―〔類〕引れて

あかゝはらけ―〔類〕赤土器

きこゆ―〔類〕聞ゆ のこれる―〔類〕残れる

可為右勝―〔類〕右勝たるへし

わか恋―〔類〕我恋

わかれち―〔明〕わかれ路〔類〕別路

とりおとしつる―〔類〕取落しつる

ものおもふかな―〔類〕物おもふ哉

なまぬり―〔類〕なま塗

又文字―〔尊〕〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕五文字

きこえ―〔類〕聞え

よろしき―〔類〕宜

ひきれうり―〔忠〕十七番ひきぬれうり

これは―〔白〕〔忠〕是はいなはかうし―〔白〕〔忠〕因幡かうし

かはらけつくり  
あかゝはらけは  
めすましきか。  
かへりあしにて、  
やすく候そ。



かはらけつくり―〔白〕〔忠〕土器作  
あかゝはらけ―〔白〕〔忠〕あかかわらけ〔類〕赤かはらけ  
かへりあし―〔白〕〔忠〕帰足

【語注】

◎挽入売は職人歌合に初出。ひきれは、「挽入」で、「ひきいれ」の変化した語。椀、皿などの入子になったものをいう。轆轤で木を挽いて作る。もっとも、絵にも見られるように、挽入売は、挽入に限らず、広く木の椀、皿などを扱ったのであろう。なお、二十番右に轆轤師があり、その月の歌に、「嬉しくも挽入にしたる槻の木のこと……」とあるように、これは轆轤を使って挽入などを作る職人である。挽入売とほとんど重なると思われるが、両者別々に出てくるところからすれば、生産と販売がある程度分化していたのであろうか。絵の中の言葉に、「これは因幡合子にて候」とあるのは、そのことを反映しているのかも知れない（「いなはかうし」の項参照）。

かはらけは、素焼きの土器で、主として、その種の盃のこと。これも轆轤を用いて作る。産地としては、古来深草が有名で、十二番本『東北院職人歌合』六番左には、「深草」という名の土器売（作）らしい職人が登場する。（これが、『飛鳥井雅康 職人歌』五番左、土器作に対応する。）ただし、この「深草」の、恋の歌および絵については、土器を扱っていることが明らかであるが、月の歌については疑問が残る。

挽入壳、土器作ともに、轆轤を用いて、食器を製造し、販売する。

◎種うるし…… 三番右、塗師の月の歌、「ながむとてぬる夜もなきにあら漆刷毛目も合はぬ村雲の月」に酷似する。

◎種うるしぬる夜はいかに 挽入に漆を塗るのである。「種漆」は、秋に採れる漆をいうのであろう。九月以降に採れる漆は、水分が少なく、下地塗り専用となる、という（三番語注「あらうるし」の項参照）。質の悪い漆なので、下句に「刷毛目は白き斑……」というのであろう。「種うるし塗る」から「寝る夜」と続く。「いかに」は、「種漆塗る」その様子はどうかといえ、の意と、「寝る夜」はどうか、すなわち、夜寝ることがあるかどうかといえ、の両義を兼ねていると見るべきであらう。前者には、「破れ挽入」、刷毛目も白き斑」が対応し、後者には、漆塗りのために夜の目も寝ないということを含みつつ、「村雲の月」を愛でて寝ない、ということが対応する。全体としては、夜通し漆塗りをしたが、月の美しさゆえに、作業に身が入らなかつた、というのであろう。二番語注「ぬる夜なくそ」、三番語注「ぬる夜もなきに」、十一番語注「しほかまのぬるよ」の各項参照。なお、『日本職人辞典』は、「ぬる」に「白膠木」を懸けると見る（「挽入壳」の項）。また、この歌を「秋の夜のひとり寝の憂さ」と解する（同項）が、月の歌であるから、いかがかと思われる。

◎われひきれ 「破れ挽入」で、罅の入った挽入をいうのであろう。なお、「破れ挽入」であることも、「刷毛目も白き斑」となることの一因であらう。

◎はけめはしろきむら雲のつき 塗りの「斑」から「村雲」と続く。刷毛目が白く残って、塗りに斑が出来ている。そのように、村雲の絶間からのぞいている月。判詞に言うように、刷毛目を雲の絶間と見立てたのである。三番右、塗師の歌の「刷毛目も合はぬむら雲の月」と同じ発想。なお、三番語注で、「月に村雲がかかっている、月のある辺りだけ白っぽくなっていることをいう」としたのは失考で、この「刷毛目も合はぬ」も、雲の絶間を意味していると見るべきであらう。

◎かくはかり…… 「飛鳥井雅康 職人歌」五番左、土器作の歌に同じ。

◎あかゝはらけのわれぬ夜もかな 上句から、「照る月の―明か―赤土器」と続く。「あかゝはらけ」は、「赤土器」で、赤い土器。当時奈良に、興福寺大乘院門跡に属する赤土器本座・新座と、同一乗院門跡に属する白土器座とがあった(国史大辞典「土器座」の項)。赤土器が、特に破れやすいとか、あるいは逆に破れにくいとかいう性質があつて、下に続くのかと思われるが、この点未考。土器が丸いので満月を連想し、その土器が破れてほしくないというように(あるいは、滅多に破れないように)、明るく照っている満月がいつまでも欠けない夜であればいいのに、というのである。なお、似た発想の歌に、二十番右、轆轤師の月の歌、「嬉しくも挽入にしたる槻の木月の欠けぬを今宵見るかな」がある。

◎はけ目といふやたゝ詞ならむ 「ただ言葉」は、俗語のこと(十六番語注「たゝこと葉」の項参照)。「刷毛目」という言葉が俗語でよくない、と言うのだが、例によって、為にする批判である。

◎絶間といふへきを 「絶間」の語を用いた歌は、「今のみと頼むなれども白雲の絶間はいつかあらんとすらん人不知V」(後撰集、九、恋一)、「秋風にたなびく雲の絶間よりもれいづる月の影のさやけさ入頭輔V」(新古今集、四、秋上)など、枚挙に遑がない。

◎ひきれにひかれていへるにや 売り物の「挽入」に影響されて、「刷毛目」と言ったのだろうか、というのを、「挽入に引かれて」と洒落たのである。

◎かの好忠か古風、いさゝかのこれるにや 「……げにと聞こゆ」と評価して、右歌を勝としている点から、「古風」というのは、いい意味で使っていると思われるが、具体的に何のことを言っているのか、未考。『袋草紙』に、『能宣集』を引いて、「春ノ日、客人アマタシルシラズマウデ来リテ、酒飲ミ侍リシニ、紅梅ヲ翫ブトテ、丹後ノ掾曾禰好忠、カハラケトリテサン侍ルトテ、我セコがそでしろたへの花の色をこれなん梅とけふぞしりぬる 返シ、あさきこき色はさらはずこゝは梅梅は梅なるにほひとぞみる 紅梅ヲ白ク読メル、イハレズ、ト人アマタ申シケルニヨリテナルベシ。是レ等ヲ盃取トハ云フナリ」(御賀ノ歌ノ作法)とあるのに、何らかの関係あるか。

◎しはすのはてのうりひきれ 「師走の果て」は、新年用の挽入がよく売れる時期。「売り挽入」は、単に、売り物

の挽入、とも解しうるが、「師走の果て」、「塗るかとするれば急ぐ別れ路」からすれば、「売り薬」などという場合も同様、詠え物ではない、不特定の人に売る挽入、という意味ではないかと思われる。同様の語構成らしいものに、五十三番左、葛籠造の月の歌の「売り葛籠」がある。全体で、下句に懸かる序詞。

◎ぬるかとするはいそくわかれち 「ぬる」に、「塗る」と「寝る」を懸ける。挽入が、漆を塗った途端に売れて行くように、共寝したかしないかのうちに、あわただしく急ぐ別れ路。飽き足りない後朝の情をいう。

◎あしさまにとりおとしつるかはらけの 具合悪く取り落とした土器のように……。全体で、下句に懸かる序詞。ただし、「悪しさま」は、人を意地悪く扱うさまをいうことが多いので、「取り落とす」を、人を貶める、という意味に解釈できれば、上二句は、相手が自分を見下す、という意味を含んでいると見るべきかもしれない。

◎われてくたけてものおもふかな 「破れて砕けて」に、土器が破れて砕ける意と、心が千々に乱れる意とを懸ける。「破れて砕けて」が心の乱れるさまを表す例は、「聞きしより物を思へばあが胸は破れて砕けて利心とくらもなし」(万葉集、十二、正述心緒)、「知らせばやたぎつ岩根に散る玉の破れて砕けて思ふ心を八重経つ」(嘉元百首、恋)などがあり、また、「破る」、「砕く」それぞれ単独でも、「宵の間に出でて入りぬる三日月のわれて物思ふころにもあるかな八読人不知つ」(古今集、十九、雑体)、「風をいたみ岩打つ波のおのれの身砕けて物を思ふころかな八重之つ」(詞花集、七、恋上)のように、同様の意味で用いられている。ただし、「わる」は、「瀬を早み岩に堰かるる瀧川のわれても末に逢はむとぞ思ふ八崇徳院つ」(詞花集、七、恋上)のように、別れる、の意で用いられる場合も多い。(右の古今集の例も、別れる、の意を懸けていると思われる。)その点からすれば、この歌の場合も、相手と別れた結果心が乱れる、という意味を懸けているのかもしれない。

◎なまぬり 「生塗り」は、塗ったばかりでまだ十分乾いていないこと、すなわち、生乾きのことを言うのである。

◎又文字、いかにそやきこえ侍れとも 「又文字」は「五文字」の誤写であろう。諸本、「五文字」。「いかにぞや聞こゆ」は、「うらがへすなど侍るも、いかにぞや聞こゆ」(安元元年右大臣家歌合、落葉、六番判詞)、「手にかけてと

いへるぞ、いかにぞや聞こえ待れど……」（六百番歌合、秋上、四番判詞）、「声たてそむるといへる、いかにぞや聞こえ待るにや」（千五百番歌合、七番判詞）などに見られるように、歌合判詞の常套句。初句がどうかと思われるが……。「恨むべきこともなにはの浦に生ふるあしぎまにのみなど思ふらむ」（村上天皇御集）のような例外もないではないが、「あしぎまに」という言葉が、普通、歌に詠まれる言葉でないから、こう言ったのであろう。

◎末の句をはらめるもあしからず 「末の句」は、歌の第四、五句。「はらむ」は、内包すること。具体的には、「悪しぎまに」という言葉が「破れて碎けて」という言葉と、よく照応していることを言うのであろう。

◎いなはかうし 「合子」は、蓋付きの容器。ここでは、木製の椀などを指す。「因幡合子」は、因幡産の合子で、因幡から仕入れた物を売っているのであろうか。未考。『井蛙抄』六に見える、為家が「堀河院百首」と近來の歌の歌風を比較して語ったという言葉、「殿上大盤は、古りたれども公物なり。因幡がうしの塗りすまして絵美しく書きたるは、人前には出でがたし。堀河院百首は殿上大盤のごとし。近日歌は因幡がうしのごとし」によれば、「因幡合子」は、当世風で派手な合子であつたらしい。

◎かへりあしにて、やすく候そ 「帰り足」は、帰り道。帰るついでだから安く売ろう、というのである。後世の「帰り馬」、「戻り駕籠」などと同様、実際は帰り道でなくても、商売の駆け引きで、こういうことを言ったのである。

### 【絵】

挽入売は、頭巾、鉢巻をし、小袖を着て、右手に合子の椀を掲げる。前に合子の椀三個。うち二個は、身と蓋との間に紙を挟む。その他、蓋のない挽入の椀三組。椀類はすべて黒漆塗りで、挽入の椀の内側は赤漆が塗られていることが分かる。ただし、諸本により、椀類の数、種類、描き方に小異がある。（白石本と忠寄本は同系統。）

土器作は、烏帽子、直垂、袴姿で、袴の股立をとり、草蛙を履く。土器の入った籠を両端に括りつけた枅を荷ない、行商の体。この籠は底に足がある。クッションをよくするためであろう。この種の籠は、十二番本『東北院職人

歌合』六番左の深草の絵にも見え、幕末の随筆『雲錦随筆』二にも、洛北畑枝村の土器師について述べ、「其の荷籠かごの形は、七十一番職人尺歌合に図したるに違はず、頗る古雅に寛ゆ」として、同種の籠の絵を載せている。また、『慕婦絵詞』巻五の、覚如屋敷門前を描く中に、荷駄を引く男がいるが、この男が荷なう籠および馬の背の籠も同様の形。籠の中身も土器のように見える。

## 【参考】

○京の町を見さいやれ大小路はな、七つ並べて大小路はな、町が立てかし七つ入れ子の鉢売ろう、祇園町へよそうを連れて立たいで、よそう連れては立とふやうたの瀬戸市、出立ちこぼいて才上町で妻売ろう

(田植草紙)

○われらの食器は銀または錫製である。日本人のは、ウルシャード漆塗りの木製で、赤か、さもなくば黒い色をしている。

(日本覚書、六)

○前述の次第で、日本人が客人に酒を出す時に用いる盃には五種類ある。……第二種の盃は、細工も飾りもまったくない素焼の簡単な陶土の盃のようなものであるが、材料となった陶土と同じ自然の色をしていて、自然のままである。この盃は、どんな模様もなく、四本の高い足が下についている杉「檜」の四角な台に置かれる。初めて相手を訪ねて来た貴人はこの種の盃で接待される。あるいは正月などのようないくつかの儀式だった祝祭には、盃は古いのもなく、使ったものでもなく、必ず新しいものでなければならぬ。これらやその他の用途のために、その盃を売る店が無数にあり、しかもほとんどだに近いほど非常に安い。それらは、彼らが完璧さと礼法に心をつくした古来の儀式にのみ用いられる。この時行なわれる礼法は普通の盃を使うのと同じである。しかし、この種の新しい素焼の盃は乾いているので、唇に付き易く、従ってそれに注意しない者は時に難儀することがある。なぜなら、飲む時には盃にひっつかないように、飲む前にまず唇を動かして十分湿らせておかないと、たやすく盃からはずすことができなからである。この事からして、そんなに不便なものを使わないでもりっぱで使い易いものを使い得るのに、それをしな

いでおいて、これらの価値の低い、たいへん使用しにくいものを使っている古い習慣と民族の思考がどれほどの力を持っているかということがうかがえるのである。

(日本教会史、一巻、二十六章)

## 十八番 饅頭売 法論味噌売

### 【職人尽】

〔吾吟我集〕寄饅頭恋 包めども外に洩るるは饅頭のあんに相違の我が契り哉 / 饅頭 甘からで味のよきこそ武者心沙糖の  
入らぬただのまんぢう / 寄味噌恋 一夜ねし納豆味噌のなまなかになれてくやしき物思ひする / 世話 落武者や後ろに  
おへる法論味噌の夕立にあふ風情なるらん〔後撰夷曲集〕饅頭にて富める人への挨拶に 饅頭のあちな仕様で 銭を持つ 思案のあ  
んは百貫にこそ入頭興 / 〔人倫訓蒙図彙〕味噌屋 簡板に節撞を出す。調味和する能あつて、人身の保養する処、一日も離るる  
べからざるもの也。 / 法論味噌 黑豆にて製する由。町へ売りに出づる男、柿渋のかたびらを上張に着る事、是法論味噌売の  
簡板也。曲物に奇麗なる弧を覆ひさし荷ない、何方にても下にすぐに着る事なし。一方を高き所へもたせ置き、人に踏み越えさせ  
ぬ由。子なき女此の棒を越ゆれば、必ず懐妊すといへり。〔狂歌ますかがみ〕寄味噌釈教 我はただ往生安楽こくしやうのみそじ  
ふたつの相ぞ床しき 翁評云、みそじ余りふたつの姿と光明皇后の詠み給ひしをととりて、殊によろしく。 / 寄味噌恋 どふよ  
くや我が身は何と奈良の味噌ほろほろ泣いて口説きかかれど 翁評云、何とか奈良のほろほろ泣いてと被成間鋪や。奈  
良の味噌断ち過ぎて聞き苦し。〔狂歌活玉集〕寄味噌釈教 釈師にてすくはせ給ふ諸人の往生安楽こくしやうの味噌入冬之 / 〔群  
踏職人尽〕饅頭売 仏名や饅頭の香の薄煙 酒堂 饅頭々々釣りの暇も波の上 亀毛 饅頭は鶴に長閑けし林氏 盛山 饅頭や杖  
今坂の臘月 志友 饅頭の噂もたらす岡涼み 蕉溪 船なしに象も繋がん美人草 路道 饅頭は異国の製にして、林和靖を受け継  
ぎたる由にて、塩瀬を根本とす。又本町にも桔梗、鳥飼の跡絶えず。近來、鈴木の風流、壺屋の一流を始め、いづれをろかならざ  
る中にも、主水を最上とす。饅頭や嘉定の中の富貴草 麥和 / 法論味噌売 味噌大豆の煮ゆる匂ひや臘月 史邦 夕立にほ  
ろ味噌売の憂き世かな 水戸 璣瑞 白雨を鬼とぞそしる法論味噌 露秀 豆殻を焚くや師走の寺の場 長梢 昔、千宗易、宇治  
の柿入るる箱を以て料紙箱とし、奈良のほろみその箱を硯宮と物好きせられしより、其の物のほどを直ちに其の物に用ひらるる事、  
誠に独歩の茶聖なりとぞ。保呂味噌や奈良から古き硯箱 黒露 はふり子のほろほろ味噌や神無月 麥和 〔職人尽発句合〕五十  
一番右 味噌造 玉みそもなる頃なり百夜草 百夜草の日数経る夜寒のいろりに、味噌水のごみ臭く鄙びたる事ながらも、同じ心  
のまめやかに、よき持なるべし。〔職人尽狂歌合〕味噌造 上白や味噌屋が軒につくばかり六尺桶と積もる大雪 ……右、雪の色

を白味噌といふ物に較べたる、おかし。つくといふ秀句もはえあり。されど文章博士人がら聊立ち勝りて（左勝）覚ゆるはや。  
／ 味噌造 手作りの味噌にはせねど此の気色うまくなかした雪折れの竹 左、手作りの味噌、四の句、味はひなべてならず。  
……左、勝つべくこそ。〔豊蔵坊信海狂歌集〕焼饅頭に寄する恋 我をちと焼饅頭のかはゆさはあむの外なるものにぞ有りける

【本文】

十八番

うりつくすたいたうもちやまんちうの  
こゑほのかなるゆふつく夜哉  
夏まではさしいてさりしほうろみそ  
それさへ月のあきをしるかな

左右ともに、させる事なし。可為持。

おもひわひ千たひ悔てもまんちうの  
のこるへき名を猶つゝむかな  
うとくのみならのみやこのほうろみそ  
ほろく〜とこそねはなかれけれ

左、くひてもものこりをつゝむ事しかり。右は、  
いますこし恋の心まさるへくや。

まむちううり

けさはいまた

あきなひなき

うりつくす〜〔類〕うり尽す たいたうもち〜〔類〕たいたう餅  
まんちう〜〔尊〕まむちう  
こゑほのかなる〜〔類〕声ほのか成 ゆふつく夜〜〔類〕夕月夜  
さしいてさりし〜〔類〕さし出さりし  
月のあき〜〔類〕月の秋

おもひわひ〜〔類〕思ひわひ 千たひ〜〔忠〕千度ひ〔類〕千度 まんちう〜  
〔尊〕まむちう  
のこるへき名を〜〔類〕残るへき名を つゝむかな〜〔類〕つゝむ哉  
みやこ〜〔類〕都

つゝむ事〜〔類〕つゝむこと  
いま〜〔類〕今

まむちううり〜〔白〕饅頭うり〔忠〕十八番饅頭うり〔類〕まむちう売

けさ〜〔白〕〔忠〕今朝

あきなひ〜〔白〕〔忠〕商

うたてさよ。

ほうろみそうり

我らも、けさ

ならよりきて、  
くるしや。



【語注】

◎ 饅頭売、法論味噌売ともに、職人歌合に初出。饅頭は、『雍州府志』六（土産）によれば、建仁寺二世龍山禅師が宋から連れ帰った林（日本名、塩瀬）淨因が、奈良で作ったのが始めで、これを奈良饅頭という、という。当初は主として、寺院の点心として用いられたが、室町時代末頃、喫茶の流行に伴って一般にも広まった。その頃には京都でも作られるようになっていたが、依然として奈良が代表的な産地と考えられていたようである。絵の中の会話は、それを暗示する。なお、饅頭売と似た職人に、五十七番右の調菜があり、恋の歌に、「いかにせむ甌に蒸せる饅頭の思ひふくれて人の恋しき」、絵の中の言葉に、「砂糖饅頭、菜饅頭、いづれもよく蒸して候」とある。ここにいふ「砂糖饅頭」が、今日普通にいふところの、甘い餡の入った饅頭である。

「ほうろみそ」は「法論味噌」で、「ほうろんみそ」、「ほろんみそ」、「ほろみそ」ともいふ。奈良で作られた、嘗味噌の一種。『雍州府志』六（土産）によれば、黒豆を煮、砕いて豆豉を作り、布巾で汁を搾り去って作るという。『下学集』に、「本朝南都法論時用之故曰爾、但世俗所言也」とある。

饅頭売、法論味噌売ともに、寺院に縁のある食品を扱う商人で、かつ、奈良に関係が深い。

注解『七十一番職人歌合』稿（七）

ほうろみそうり―「白」〔忠〕法論味噌売〔類〕ほうろみそ売  
我ら―「白」〔忠〕我未〔明〕我々〔類〕われら  
なら―「白」〔忠〕奈良 きて―「白」〔忠〕来て

◎うりつくす 未考。次々項参照。

◎たいたうち 『運歩色葉集』(静嘉堂文庫本・元龜二年京大本)に「大錫餅ダイクワモチ」、弘治二年本『節用集』に「大錫餅ダイクワモチ」、惠空編『節用集大全』に「大錫餅」などであるが、どのようなものであったか未考。「錫」ないし「錫」は、餅モチを和した餡あん。「餅」とあるが、饅頭まんとうの一種であろうか。

◎こぼのなるゆふつく夜哉 「夕月夜」は、夕方の月夜。時期については、『和歌童蒙抄』一(天部)に、「宵に出てとく入るをいふ也」とあり、『頭註密勘』五の頭詔註にも、「暮の月夜也。ゆふさきり西の山のはにみえて入たる月也」とあるが、同定家勘には、「西の山のはにかぎらず、只不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>東山」、夕陽にかはりてそらにみゆるを云也。上絃などまではまことにをぐらくほのかなり」とし、『藻塩草』一(天象)は、「夕の月也。六日七日時分迄を云也。但又、十日あまりまで共云り」とするなど、諸説により幅があるが、およそ三日月から上弦月ぐらいまでの頃と考えてよからう。その頃の月は、満月に較べて光が淡く、また、まだ空が明るくて、あまり目立たないので、「秋の夜の心を尽くす始めとてほのかに見ゆる夕月夜かな<sub>ハ</sub>実家<sub>ノ</sub>」(千載集、四、秋上)、「風吹けば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の夕月夜かな<sub>ハ</sub>忠隆<sub>ノ</sub>」(金葉集二度本、三、秋)のように、「ほのか」、「ほのめく」などと表現されることがままある。またその際、月の光が「ほのか」というのに懸けて、「夕月夜いるさの山の木隠れにほのかにも鳴くほととぎすかな<sub>ハ</sub>宗家<sub>ノ</sub>」(千載集、三、夏)のように、鳥の声などが「ほのか」に聞こえるという類の歌もある。ここも、上句からの続きで、「たいたうちや饅頭」という売り声が「ほのか」であると同時に、「ほのかなる<sub>ハ</sub>夕月夜」と続き、月の光が淡いことを言う。ただし、上の宗家の歌や、「雲居より遠山鳥の鳴きて行く声ほのかなる恋もするかな<sub>ハ</sub>躬恒<sub>ノ</sub>」(新古今集、十五、恋五)、「ひさかたのみどりのそらの雲間より声もほのかに帰るかりがね<sub>ハ</sub>師氏<sub>ノ</sub>」(新勅撰集、一、春上)などに見るように、「声」が「ほのか」ないし「ほのめく」という表現は、時鳥、鶯、山鳥など、鳥についていう場合が圧倒的に多く、このように、物売りの声についていうことは、勿論異例である。それにしても、売り声が「ほのか」であるというのは、初句に「売り尽くす」とあるのに対応しているのであるうか。完全に売り切ったのなら、売り声自体必要ないから、初句は、ほほ<sub>・</sub>売り<sub>・</sub>尽くした、という意味であろうか。い

ずれにしても、分かりにくい。また、ここで特に「夕月夜」を詠んだ理由も理解しにくい。あるいは、「夕月夜」という名の鰻頭でもあったのであるうか。

◎夏まではさしいてさりしほうろみそ 未考。法論味噌は、暑い時期に仕込んで、秋口に売りに出たものか。

◎それさへ月のあきをしるかな 「それさへ」は、それでさえ。例は多くはないが、「散る花の流るる水に積もらぬもそれさへ雪の心地こそすれへ瞻西上人」(橋本公夏筆本金葉集、一、春)など、歌にも用いられる語。「月の秋」は、月の美しい秋。「月の秋あまた経ぬれと思ほえず今夜ばかりの空の気色は」(長秋詠藻、上)などの例がある。夏まではさし出でなかったが、それでも、月の美しさに引かれて秋には外へ出る、というのである。実際には職業として法論味噌を売り歩くのだが、月を愛でる心から出歩くのだと見做したのである。

◎おもひわひ千たひ悔てもまんちうの 「千たび悔ゆ」は、何度も何度も後悔すること。下句からすれば、恋ゆえに浮き名の立ったことを後悔するのである。ただし、「悔いの八千たび」という歌語はあるが、「千たび悔ゆ」という表現は、歌には見当たらない。「悔ても」に「食ひても」を懸け、「鰻頭の」と続く。

◎のこるへき名を猶つゝむかな 「鰻頭の」から「残る」と続く。いくら食っても食い飽きないで、食い残りの鰻頭を包んで持ち帰る。そのように、残るべき浮き名をなおつつむ、というのである。足立勇『近世日本食物史』(『日本食物史上下』所収)第二章二に指摘するように、「名をつつむ」に、「菜(鰻頭の中に入れる野菜)を包む」を懸けていると見るべきかも知れない。「残る」は、「千たび悔ても」からの続きとしては、悔いが残るのだと解しうるが、同時に「残るべき名を猶つつむ」という続きからは、浮き名が恋死にした後に残るのだと解すべきで、その方が恋の歌としては自然であろう。「名を一つつつむ」という言い方は余り用いられないが(「名を一つ惜しむ」あるいは「涙を一つつつむ」などが普通)、鰻頭を「包む」に引き寄せて、あえて言ったものであろう。「名を猶」は、同音の繰り返しの面白さを狙ったか。なお、『日本職人辞典』は、「鰻頭売が時々、商い物をつまみ食いをするというのだから、恋の歌としては殺風景というほかはない」(「鰻頭売」の項)とするが、いかが。もっとも、「殺風景」なのは職人歌の常である。

◎うとくのみならのみやこのほうろみそ 二人の関係が疎遠になる一方だ、の意の、「疎くのみ成」から「奈良の都—法論味噌」と続く。

◎ほうろく 「ほうろ味噌」から「ほうろ」と続く。「ほうろ」は、涙のこぼれ落ちるさま。ただし、伝統的な歌では、「山鳥のほうろはるとなく声聞けば父かと思ふ母かと思ふ人行基V」（玉葉集、十九、釈教歌）のように、山鳥（雉など）の鳴く声を表すか、または、「秋されば野になく雉のほうろはると涙こぼるる夕まぐれかな人家長V」（新撰六帖、一）のように、それを掛詞に用いて涙のこぼれることを言う場合がほとんどである。「ほうろ味噌」から「ほうろ」と続けるのは、勿論、異例。

◎けさはいまたあきなひなきうたてさよ 右の法論味噌売に話しかけた言葉であろう。

◎我らも、けさならよりきて、くるしや 「我ら」は、明曆板本では「我々」と読めるが、他の諸本に従って、「我ら」としておく（一番語注「我らも」の項参照）。左の鰻頭売に応えた言葉であろう。鰻頭売が奈良から来たことを知っていて、「我らも」と応じたものと思われる。奈良から京都までは十里ほどあるので、実際には伏見辺りで一泊して来たのであろう。

### 【絵】

鰻頭売は、笠を被り（笠の種類は未考）、覆面をし、僧衣を着て、脚絆（類従本のみは、確認しがたい）、草鞋を履く。恐らく剃髪しているのであろう。この姿は、鰻頭が当初、寺院の点心として用いられたことと関係あるか。前に、箱を両端に付けた枵を置く。東博本以外の諸本は、枵と箱を結ぶ紐を描く。

法論味噌売は、烏帽子、直垂、袴姿に、脚絆、草鞋を履く。前に、曲物の桶を両端に付けた枵を置く。桶の上には、菰を被せる。白石本および忠寄本は、桶の綴じ目を描かない。菰を被せるのは、法論味噌は湿気を嫌うので、雨などを避けるためであろう。『天狗草紙』東寺巻の東寺門前を描く中に、菰を被せた曲物桶を運ぶ、これに似た男の姿が見える。『人倫訓蒙図彙』にも、「曲物に奇麗なる菰を覆ひさし荷ない」とあって、同様の絵を載せる。

両者横に相並んだ形で描かれ、顔の向きからも会話している様子が窺われる。

【参考】

○へ申し申し。へ何事ぞ。へ此の饅頭を買はせられひ。へ何といふ物じや。へ饅頭共申し、点心とも申して、上つ方のお衆も参るものでござる。へ何と、てんひんぢや。へいや、点心共申し、饅頭共申すが、一つ参つて御らうじられひ。へ中々、聞きも及ばぬ物じやが、むまひ物か。へ中々、ことの外むまうござる。一つ上がりませひ。

(虎明本狂言、まんぢう)